

## 第6分科会

# EdTech で推進する個別化教育

### 報告者

- 小城 擁二 氏      atama plus 株式会社  
大学・予備校支援事業部高大接続チームオーナー
- 新井 昌明 氏      立命館大学 入学センター 入学課 課長
- 柏木 崇 氏      株式会社ベネッセコーポレーション  
VIEW next 編集部 統括責任者
- 宿久 洋 氏      同志社大学 同志社データサイエンス・  
AI 教育プログラム運営委員会 委員長  
／文化情報学部 教授

### コーディネーター

- 山本 康友 氏      同志社女子大学 薬学部 教授



# EdTech で推進する個別化教育

コーディネーター

同志社女子大学 薬学部 教授 山本 康友

---

---

## ○本分科会のねらい

AIを始めとする科学技術の進化、急速な少子高齢化の進行など、大きく変動する日本社会において、学修者一人一人の可能性を最大限伸ばす教育が求められている。教育 (Education) × 科学技術 (Technology) が EdTech であり、学生一人一人の特性に合った教育を、「きめ細かく」かつ「深く」提供できる可能性を秘めている。本分科会では、教育産業界および大学から講師を迎え、AI等の Technology が個々の学生の可能性をどのように伸ばすことができるのか、具体例をご紹介いただくと共に、参加者間の意見交換を通じて、今後の「個別化教育」について考える契機となることをねらいとした。

## ○報告の概要

### 講演1：AIによる個別最適学習と高等教育における活用事例

atama plus 株式会社 大学・予備校支援事業部 高大接続チームオーナー

小城 擁二 氏

小城氏には、AI教材を利用した入試用学習プログラム、入学前教育 / 初年次教育プログラムについてご講演いただいた。atama plus 社の AI教材で数学の入学前教育プログラムを利用した高校生のデータ解析によると、年内入試で大学進学を決めた高校生のうち、理系学生では約8割が、文系学生では約9割が中学数学まで遡って学習をしている結果であった。高校3年生でも中学数学の理解度が一部不十分であるという状況を意味しており、また遡り学習の単元も多岐に渡ることから、個別化教育の重要性が示された。atama plus 社の AI教材は、学習者一人ひとりの理解度を診断し、瞬時に個別最適学習カリキュラムを提示することができる教材である。大学入試や入学前教育での本教材を活用したプログラム事例についてもご紹介いただいた。

### 講演2：EdTech を活用した新しい総合型選抜の在り方

立命館大学 入学センター入学課 課長

新井 昌明 氏

新井氏には、atama plus 社の AI教材を活用した立命館大学の総合型選抜 (AO 選抜) についてご講演いただいた。学部ごとにもつアドミッション・ポリシーを、入学後に求められる特に重要な学力素養を「単元」単位で具体的に指定し、それを EdTech 教材で個別学習、修得することを出願要件として設定する総合型選抜 (AO 選抜) を、立命館大学では 2023 年度入試より導入している。これにより、高等学校での履修の有無を問わず誰でも平等にチャレンジできる機会を生徒へ提供することで、多様な学習歴を持つ志願者も集まった。「学部指定単元 AI 学習プログラム (通称: UNITE Program<sup>®</sup>)」の受講→総合型選抜、と連携させることで、受験生は高い学習意欲を持って学部が指定した科目の単元を EdTech で学習し、入学後の学びにスムーズに接続出来ていることが紹介された。

### 講演3：生成 AI と高校教育

株式会社ベネッセコーポレーション VIEW next 編集部 統括責任者

柏木 崇 氏

柏木氏には、高等学校における生成 AI の活用事例と、次期学習指導要領における AI の位置づけに関してご講演いただいた。教育現場では当初は生成 AI を警戒する向きがあったものの、最近では国のガイドラインが示され、小中高での利用も普及してきたことが示された。高校生における生成 AI の使用割合は年々高まっており、生成 AI 使用に対する高校教師の不安も近年は減少傾向にあるが、一方で課題やレポー

トに生成 AI を不正に利用することに対する懸念は増加している状況が示された。高校における生成 AI の取り組みはまだまだ発展途上だが、その中で積極的に活用している事例についてご紹介いただいた。ご講演の後半では高等学校の学習指導要領について紹介があり、次期改訂では生成 AI の使用を前提として議論が進んでいるということが示された。

**講演 4：大規模私立大学における生成 AI と電子教科書を援用したデータサイエンス・AI 教育**  
同志社大学 同志社データサイエンス・AI 教育プログラム運営委員会 委員長 / 文化情報学部 教授  
宿久 洋氏

宿久氏には同志社大学の同志社データサイエンス・AI 教育プログラム (DDASH) における、NTT 西日本と連携した生成 AI 活用型学習支援システム (DAIB) の開発・運用および授業実践についてご講演いただいた。講演では、AI への質問機能のほか、授業資料や授業動画の要約、設問作成、資料および動画のキーワード検索、さらに動画については検索結果に基づき必要な箇所のみを視聴できる機能など、受講生の学習を効果的に支援する多様な機能を備えたシステムについてご紹介いただいた。今後はメタ認知チェックや理解度確認問題を組み込んだ個別最適化学習へと展開していく予定であることが示され、生成 AI を活用した先進的な取り組みについて、分かりやすくご紹介いただいた。

### ○報告に対する質疑ならびに全体討議の内容

Q1：DAIB で授業要約を利用することで、授業中の学習への動機づけが下がる懸念はないか。また、DAIB の導入前と導入後で、学習効果にはどのような差が見られるか。

(宿久氏)：主観的な評価として、アンケートではポジティブな意見が多い。学習効果に関しては、プログラムを最後まで受講する人がほとんどであり、ドロップアウトする学生は少ない。また、元々「やらされている」感が強い学生に対しては、学習しやすい機能を搭載することで、学習意欲を喚起している。

Q2：入試のプロセスに atama plus 社の AI 教材を組み込んだ場合、受験生本人以外が (替え玉で) プログラムを受講している懸念はないか。

(小城氏)：詳細まではお答えできないが、写真と学習データを解析することで、他人のなりすましを防止することが可能。

Q3：一般入試で入ってきた学生と比較して、UNITE Program で入学した学生の特徴は。

(新井氏)：ゼミ等ではリード役として他の学生をけん引する学生が多い。受け入れ学部の教員からは、入学後の学習意欲が高く、目的意識も具体的であるという声を伺うことも多い。

Q4：合格後に入学前教育を実施するのと、入試プロセスの中で UNITE Program を実践するのとでは、どのような違いがあるか。

(新井氏)：atama plus 社の AI 教材を入試プロセスに組み込むことにより、各学部で必要とされる単元を明確化することができ、入試プロセスの中でアドミッション・ポリシーのさらなる可視化につながったと考えている。また、入学後の学びとの一体性も高まり、各学部における学びの内容を高校生に伝えやすくなった。

Q5：「生成 AI の使用が疑われる不正な提出レポート」に関して問題が生じていると回答した教員の割合は、2024 年と 2025 年を比較すると、中学・高校教諭では増加している一方、大学教員では低下している。このような差が生じた理由は何か。

(柏木氏)：確かに大学教員では割合は低下しているが、この点に対する懸念が減少したというよりも、むしろ問題意識の所在が変化した結果であると考えられる。具体的には、「生成 AI に関する教員自身の知識不足」や、「生成 AI のどのような利用が不正行為に該当するのかという判断基準」に関心が移行していることが背景にあると考えられる。

Q6：レポートの不正行為の定義とは。また、AI時代にレポートで学習の定着を図ることは可能なのか。

(柏木氏)：生成 AI を使用した場合には、レポートの中でどの部分で使ったのかを明記させるほか、生成 AI に入力する前のドラフトを提出させる。また、生成 AI の回答をどのように検証したのか、あるいはそこからどのようにアイデアを発展させたのかについても記述させる。こうした観点を評価基準に組み込むことで、生成 AI を活用した場合であっても適切な評価が可能であるとする事例が示されている。

(宿久氏)：turnitin 社と tyton 社の合同調査では、生成 AI を利用している学生は 2023 年では 43% であったのが、2024 年では 59% と増加している。また、学生の 50% が、学内で禁止されている場合でも授業や課題で生成 AI を利用したいと考えている。そういう状況において、今後の方向性としては「過程を記録させる」という考え方が出てきている。レポート作成において、どのくらいの時間をかけたか、外部からのどのような情報を入力したか、どの段階で AI を使ったのか、そのログごと提出させて評価する、という考え方である。Turnitin 社の Feedback Studio というソフトウェアに、それらを検査する機能が搭載されている。

Q7：ご紹介いただいた生成 AI は有料版か。

(宿久氏)：講演で紹介したものは有料版。

(柏木氏)：講演で紹介した事例の多くは、生徒は無料版を使用していると思われる。

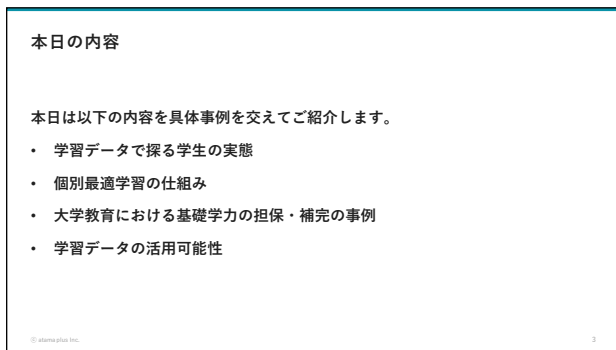
スライド1



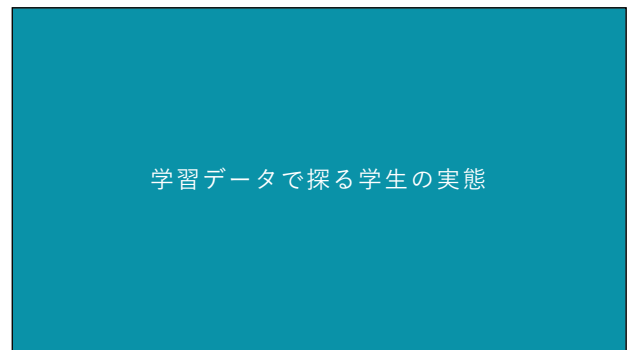
スライド2



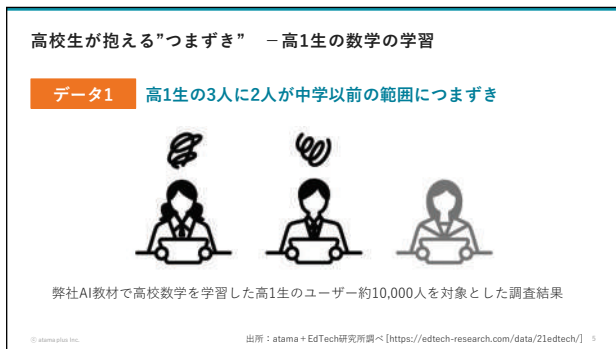
スライド3



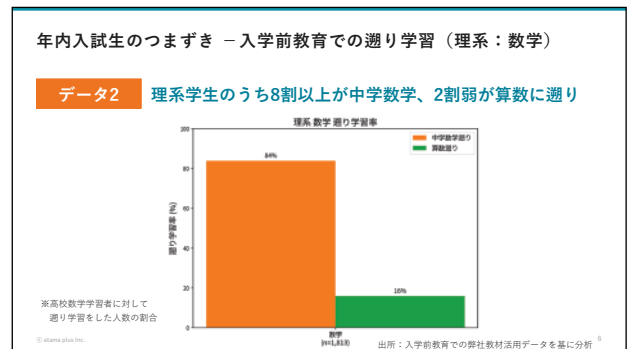
スライド4



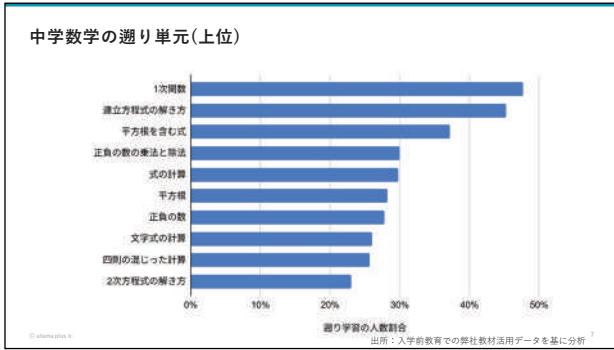
スライド5



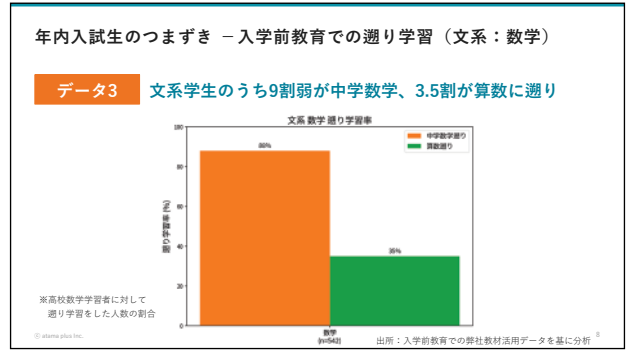
スライド6



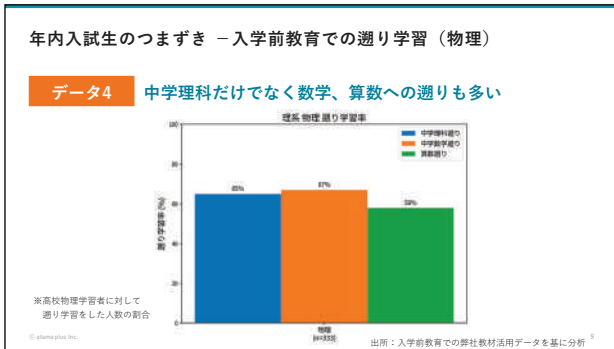
スライド7



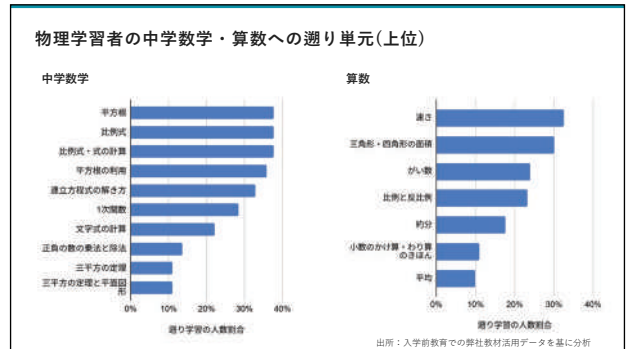
スライド8



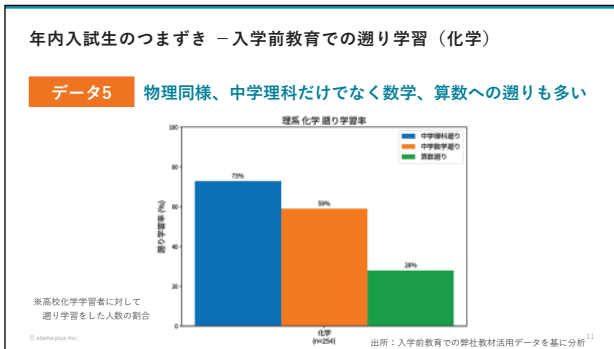
スライド9



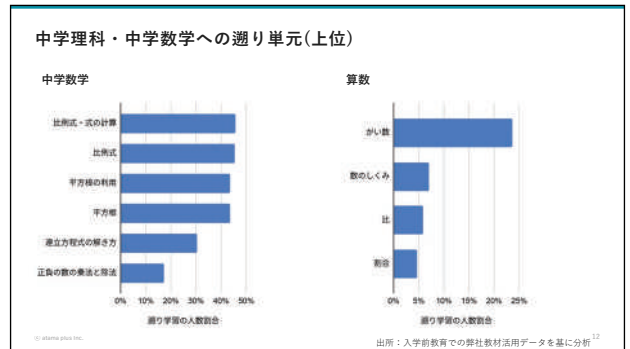
スライド10



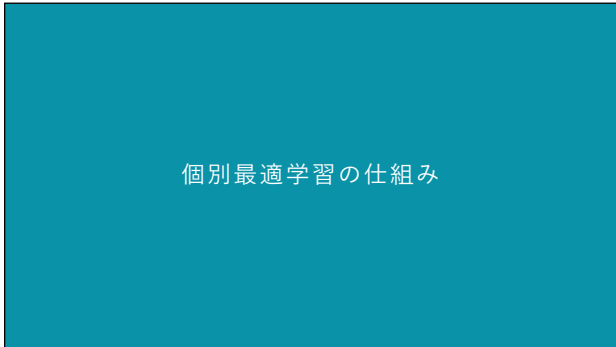
スライド11



スライド12



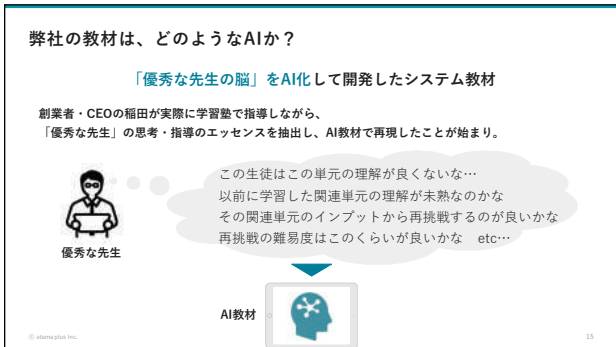
スライド 13



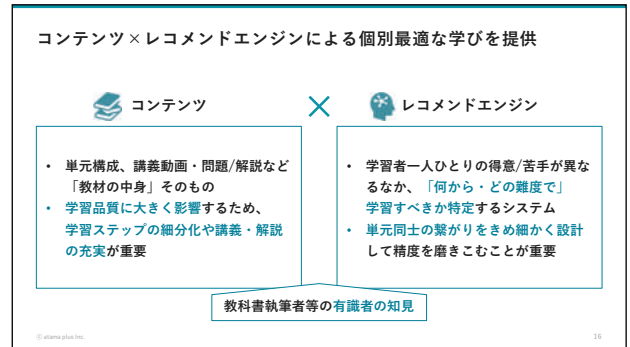
スライド 14



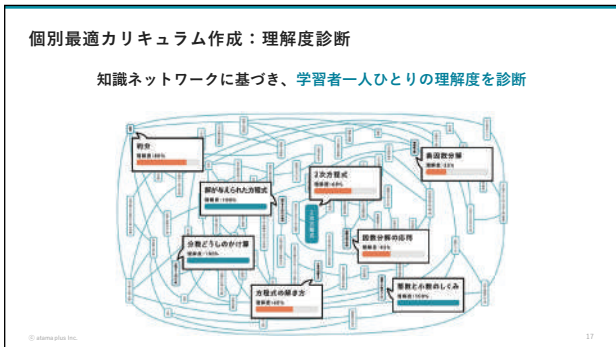
スライド 15



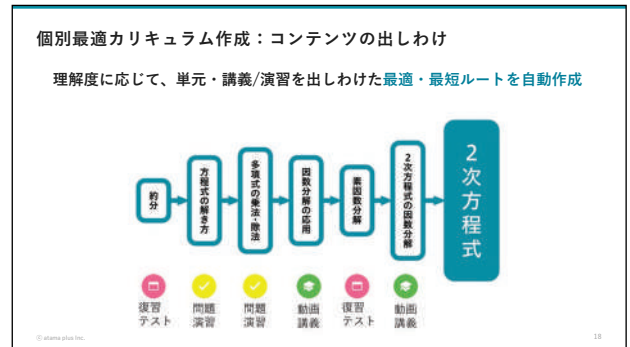
スライド 16



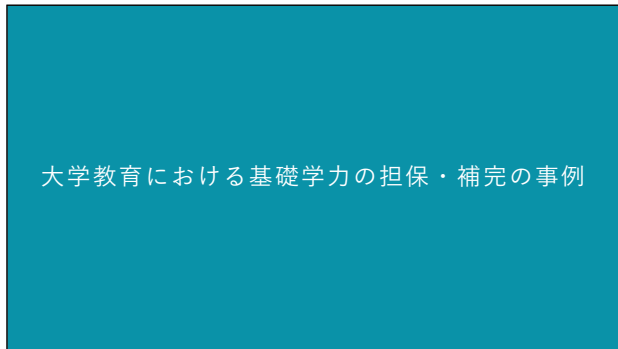
スライド 17



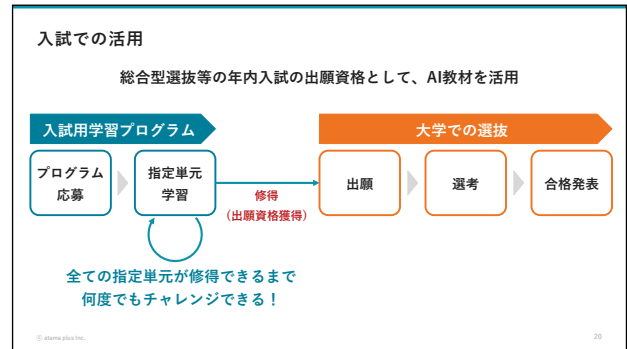
スライド 18



スライド 19



スライド 20



スライド 21

入試プロセスで活用する価値

- 既存の入試形式だとチャレンジできなかった受験生に間口を広げられる
- 過去の履修歴によらず、大学の学びに直接必要となる単元粒度での理解を担保できる
- 学習データに基づき、プログラム内容を改善できる

スライド 22

入学前教育、初年次教育での活用

よくお伺いする課題感

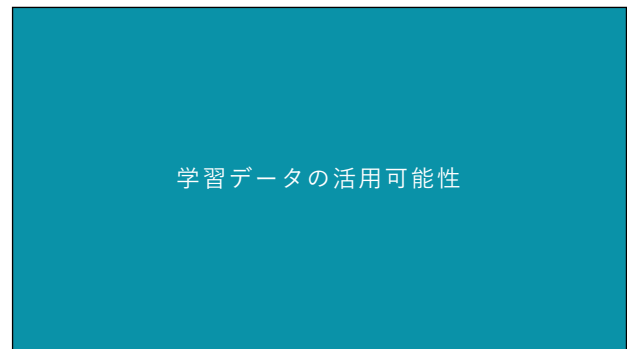
- 入学生の学力の幅が以前よりも大きくなり、教員がフォローしきれない/負担が大きくなっている
- 入試で問えていないが、入学後の学習で必要な学力を補完したい
- 学部学科の学びに必要な数学II/Bを高校で履修していない入学生が一定数いる
- 入学前教育の結果を大学の教育に活かしていない

スライド 23

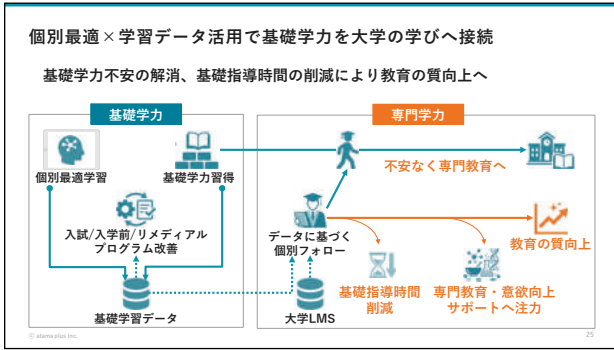
入学前教育、初年次教育で活用する価値

- 年内入試生の基礎学力不安を解消して入学を迎えられる
- 基礎学力不足により大学の講義についていけず退学に繋がるリスクを下げられる
- 学習データにより、プログラム内容の改善、入学後の学習支援を可能とする

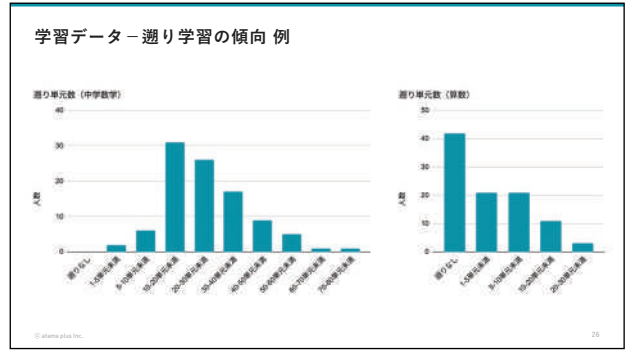
スライド 24



スライド 25



スライド 26

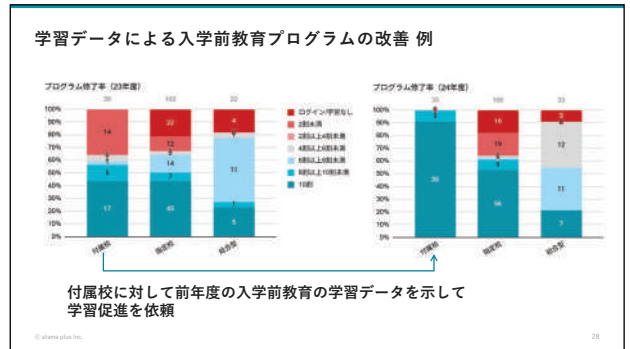


スライド 27

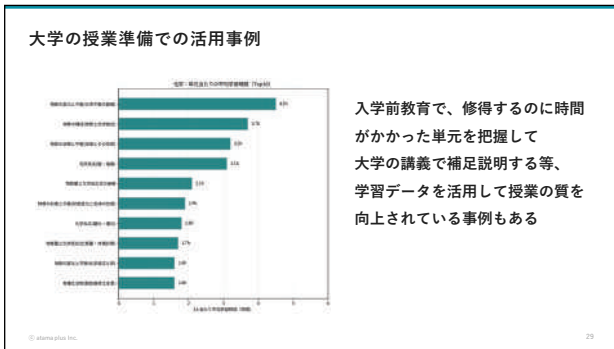
学習データ - 学生個別データ例

基本情報		修得率	合計学部分数	学習時間	選り単元数				学習総数
ユーザーID	入試形態	達成率		学習科目	割合	算数	中学数学	高校数学	合計
XXXXXXXX	指定校推薦	100%	3,560	220	8%	5	29	1	35
XXXXXXXX	指定校推薦	100%	834	33	5%	0	8	1	9
XXXXXXXX	指定校推薦	16%	90	9	12%	0	4	0	4
XXXXXXXX	指定校推薦	100%	571	20	4%	0	5	0	5
XXXXXXXX	総合型選抜入試	8%	292	56	20%	0	9	0	9
XXXXXXXX	総合型選抜入試	100%	1,902	245	14%	0	25	1	26
XXXXXXXX	総合型選抜入試	61%	928	86	11%	0	18	0	18
XXXXXXXX	総合型選抜入試	100%	1,909	413	22%	0	38	1	39
XXXXXXXX	総合型選抜入試	100%	1,625	103	6%	0	23	1	24
XXXXXXXX	総合型選抜入試	0%	123	118	100%	1	2	0	3
XXXXXXXX	付属校推薦	100%	892	246	31%	4	44	0	48
XXXXXXXX	付属校推薦	100%	789	112	15%	0	11	1	12

スライド 28



スライド 29



スライド 30

ご導入大学 ※公表許可を頂いている大学の抜粋

スライド 31

ご清聴ありがとうございました。

登壇内容のお問い合わせについては、下記からお願いします



「atama+ 高大接続」で検索するとトップに出ています

URL : <https://corp.atama.plus/service/for-universities/>

© atama.plus Inc.

31

スライド 32

atama+

AIで、一人ひとりに、最短で「わかる！」を。

スライド1

**EdTechを活用した  
新しい総合型選抜の在り方**

立命館大学入学センター 入学課 新井 昌明

スライド2

- ① UNITE Program導入の背景
- ② UNITE ProgramおよびAO選抜について
- ③ UNITE Program実施結果および到達点について

スライド3

**問題意識**

- ・基礎学力が意欲・ビジョンかではなく、どちらも重要
- ・大学の学びと高校の教科学習のつながりをもっと明確化できないか  
(その学部でやりたいことを実現するためには、教科、科目の中でも特にここが重要)
- ・本当にやりたいことを見つけて、本気のやる気になってからでもチャレンジできる入試の有り様とは？
- ・履修主義でなく、修得していることを一般選抜以外で測ることができないか
- ・**総合型選抜、学校推薦型選抜の学生自身が持つ不安**
- ・子供たちの学習歴を踏まえた新たな入試形態の検討（入試そのもののDX）

この他にも複数の問題意識を抱えながら、解決できる方法を模索していた

スライド4

**atama plus社との共同研究会の設置と設定テーマ**

2020年12月22日 学校法人立命館と atama plus株式会社が、AI や学習データを活用し、「新しい高大接続と入試の在り方を考える共同研究会」を設立。まず研究テーマとして3つの柱を設定。

- (1) **附属校生の学内推薦合格後の基礎学力定着モデル構築**  
立命館大学に内部進学する附属校生（特に理系進学者）を対象とした基礎学力定着への実践  
**範囲を大きくし、入学前教育の在り様についての検討を強化**
- (2) **学習歴を踏まえた新たな入試企画の検討**  
探究型の学びを行ってきた生徒の基礎学力と学習歴を踏まえた入試企画  
学部のアドミッションポリシーに合致する基礎学力の確かな修得と意欲や活動を評価する  
**具体施策として学部指定単元AI学習プログラム（UNITE Program）を実施**
- (3) **オンライン入試のプラットフォームの開発**  
地域によらず受験機会を提供できる形の検討

スライド5

**プログラム受講～入学までの流れ**

- 01 プログラム出願 (9～8月)  
学部に必要な atama+ のIDを取得
- 02 指定単元の学習 (5～8月)  
atama+ で学部が指定する単元を学習・単元ごとに修得認定試験を受ける
- 03 AO入試出願 (9月)  
指定単元の修得認定試験をすべて合格した方(終了者)のみ出願可能
- 04 入試備考 (10月)  
出願学部が指定する第1次～第2次選考を実施
- 05 合格発表 (11月)  
入試選考結果、合格発表
- 06 入学前教育 (12月～入学)  
合格者を対象に、atama+ において、入学前に必要となる単元をさらに学習

UNITE Programの受講 → 総合型選抜 (AO入試) の受験 → 継続した学習で入学後の学びへスムーズに接続

スライド6

**UNITE Program 採用学部の変遷**

2023年度	2024年度	2025年度	2026年度	2027年度
入試	入試	入試	入試	入試
経済学部 スポーツ健康科学部 食マネジメント学部	薬学部	政策科学部 総合心理学部 生命科学部 情報理工学部		産業社会学部 デザイン・アート学部

スライド7

### UNITE ProgramからAO選抜入試までの流れ

■概要  
2023年度総合型選抜 AO選抜入学試験（2023年4月入学）から開始。  
「学部指定単元AI学習プログラム（通称：UNITE Program）」で各学部が指定する数学の単元を学習し、プログラムを修了することが、対象のAO選抜への出願要件として設定している。

■実施学部  
（文系）  
政策科学部、総合心理学部、経済学部、スポーツ健康科学部、良マネジメント学部、デザイン・アート学部（理系）  
情報理工学部、生命科学部、薬学部

■対象  
実施年度末の3月31日までに高等学校等を卒業・卒業見込みの者

入試までの流れ  
UNITE Programの修了後、各学部で指定された単元を学習し、プログラムを修了する。修了後、各学部で指定された単元を学習し、プログラムを修了する。修了後、各学部で指定された単元を学習し、プログラムを修了する。

UNITE Program  
2023年度入試：2023年4月入学（2022年10月～2023年3月）  
2024年度入試：2024年4月入学（2023年10月～2024年3月）  
2025年度入試：2025年4月入学（2024年10月～2025年3月）

スライド8

### UNITE Program 学習指定単元と学部の学びとの関連性（例：経済学部）

指定単元と学習所要時間のめやす ◎43～53時間

科目	単元名	単元内容
数学I	データの分析(データの帰属)	データの分析(データの帰属)
数学A	場合の数と確率(場合の数・確率の基本的性質)	場合の数と確率(場合の数・確率の基本的性質)
数学B	場合の数と確率(独立な試行・復元試行の確率)	場合の数と確率(独立な試行・復元試行の確率)
数学C	指数と対数(指数・対数の応用)	指数と対数(指数・対数の応用)
数学D	多項式の除法(剰余法と剰余)	多項式の除法(剰余法と剰余)
数学E	剰余(剰余)	剰余(剰余)
数学F	剰余(いろいろな剰余)	剰余(いろいろな剰余)
情報I	プログラミングの基礎	プログラミングの基礎
情報II	ネットワークとデータベースの活用	ネットワークとデータベースの活用

指定単元と学習所要時間のめやす ◎42～52時間

科目	単元名	単元内容
数学I	データの分析(データの帰属)	データの分析(データの帰属)
数学A	場合の数と確率(場合の数・確率の基本的性質)	場合の数と確率(場合の数・確率の基本的性質)
数学B	場合の数と確率(独立な試行・復元試行の確率)	場合の数と確率(独立な試行・復元試行の確率)
数学C	指数と対数(指数・対数の応用)	指数と対数(指数・対数の応用)
数学D	多項式の除法(剰余法と剰余)	多項式の除法(剰余法と剰余)
数学E	剰余(剰余)	剰余(剰余)
数学F	剰余(いろいろな剰余)	剰余(いろいろな剰余)
情報I	プログラミングの基礎	プログラミングの基礎
情報II	ネットワークとデータベースの活用	ネットワークとデータベースの活用

学部のこんな学びに役立ちます！  
●経済統計 ●計算経済 ●社会経済 ●行動経済 ●環境経済 ●ファイナンス/リスク

スライド9

### UNITE Program 学習指定単元と学部の学びとの関連性（例：情報理工学部）

指定単元と学習所要時間のめやす ◎45～56時間

科目	単元名	単元内容
数学I	図形と方程式(図形と方程式)	図形と方程式(図形と方程式)
数学A	指数と対数(指数関数)	指数と対数(指数関数)
数学B	指数と対数(対数関数)	指数と対数(対数関数)
数学C	三角関数(三角関数の応用)	三角関数(三角関数の応用)
数学D	三角関数(三角関数の応用)	三角関数(三角関数の応用)
数学E	数式(数式の演算)	数式(数式の演算)

全単元と学部での学びとの関連性  
図形と方程式、平面ベクトル<sup>※</sup> CGやVRなどのマルチメディア、ロボティクスなど最先端技術に活用されています。  
対数関数 情報理論と密接に関わっており、情報伝送・符号化・復元、暗号の基礎などでも活用されています。  
剰余法/剰余法 剰余法と剰余法は、計算機の動作やプログラミングで用いられ、情報工学・人工知能の基礎になっています。  
剰余 剰余の考え方は、計算機の動作やプログラミングと深い関わりがあります。  
剰余(いろいろな剰余) 剰余の考え方は、さまざまな「情報の伝達・検出・検閲」などに活用されています。情報理論、符号化、暗号などにも活用されています。

※「平面ベクトル」「図形と方程式」「剰余法」「剰余」はUNITE Programの指定単元に含まれません。入学前講座などで学ばれています。

学部のこんな学びに役立ちます！  
●情報理論 ●データ構造とアルゴリズム ●通信工学 ●マルチメディア ●CG/VR ●ロボティクス ●情報工学/人工知能

スライド10

### UNITE Program;2025年度入試 実施結果概要

学部・学科	プログラム受講生数	プログラム修了者数	AO選抜応募者数	AO選抜合格者数	AO選抜入学人数
経済科学部	86名	57名	49名	12名(24%)	10名
総合心理学部	90名	43名	39名	6名(15%)	14名(15.7%程度) ※AO選抜枠内での合計
経済学部	42名	23名	20名	5名(25%)	12名
スポーツ健康科学部	71名	19名	15名	6名(40%)	—
良マネジメント学部	79名	54名	52名	11名(21%)	15名(15.1%程度) ※AO選抜枠内での合計
デザイン・アート学部	89名	41名	35名	13名(37%)	—
情報理工学部	116名	66名	57名	23名(40%)	20名
生命科学部 応用化学科	9名	3名	3名	1名(33%)	6名(15.8%程度) ※AO選抜枠内での合計
生命科学部 生化学科	4名	3名	3名	0名	5名(17.6%程度) ※AO選抜枠内での合計
生命科学部 応用情報科学科	4名	3名	3名	1名(33%)	6名(15.8%程度) ※AO選抜枠内での合計
薬学部	89名	37名	22名	1名(4.5%)	4名
合計	621名	336名	327名	94名	107名(UNITE Program対象の集計合計)


プログラム受講生の割合 約60%  
プログラム修了者の割合 約90%

スライド11

### AO選抜入試の概要（2025年度入試）

学部・学科	UNITE Programでの学習科目	AO選抜方式名称	AO選抜方式方法
経済科学部	数学	UNITE Program <sup>※</sup> (数学)形式II方式	第1次選考：書類選考 第2次選考：面接
総合心理学部	数学	総合型総合型 (UNITE Program <sup>※</sup> データサイエンス型)	第1次選考：書類選考 第2次選考：面接
経済学部	経済学 経済学	UNITE Program <sup>※</sup> (経済学)形式I方式	第1次選考：書類選考 第2次選考：面接
スポーツ健康科学部	数学	CREA方式 (総合型総合型 UNITE Program <sup>※</sup> 型)	第1次選考：書類選考 第2次選考：面接
良マネジメント学部	数学 AI情報	AI情報型 (UNITE Program <sup>※</sup> 型)	第1次選考：書類選考 第2次選考：面接
情報理工学部	数学	UNITE Program <sup>※</sup> 方式	第1次選考：書類選考 第2次選考：面接
生命科学部 応用化学科	応用化学科	UNITE Program <sup>※</sup> 方式 (総合型総合型)	第1次選考：書類選考 第2次選考：面接
生命科学部 生化学科	生物学	UNITE Program <sup>※</sup> 方式 (総合型総合型)	第1次選考：書類選考 第2次選考：面接
生命科学部 応用情報科学科	情報工学	UNITE Program <sup>※</sup> 方式 (総合型総合型)	第1次選考：書類選考 第2次選考：面接
薬学部	薬学 薬学	UNITE Program <sup>※</sup> (薬学)形式I方式	第1次選考：書類選考 第2次選考：面接

スライド1




2025年度 第31回FD・SDフォーラム  
 第6分科会「EdTechで推進する個別化教育」  
**生成AIと高校教育**

株式会社ベネッセコーポレーション  
 学校カンパニー 教育情報センター  
 VIEW next編集部 統括責任者  
 柏木 崇

スライド2

1 自己紹介



VIEW next編集部 統括責任者 柏木 崇

1999年ベネッセコーポレーション入社。進研ゼミ高校講座の事業を行う部署に配属され、大学受験生向けの国語教材の企画・編集に携わる。

その後、高校1・2年生向け国語教材、数学教材の企画・編集を経て、2012年、ベネッセ教育研究開発センター（現・ベネッセ教育総合研究所）に異動し、高校教師向けの教育情報誌「VIEW21」高校版の企画・編集を担当。

2013年7月より、「VIEW21」高校版編集長。2018年4月より、「VIEW21」高校版、教育委員会版を統括するVIEW21編集部統括責任者。2021年4月より、現職。

年間100名以上の高校教師を取材し、現場の実践を始めとする教育情報と、これからの学校教育のあり方を問うメッセージを発信している。

公益社団法人 全国工業高等学校長協会「工業高校生の専門的職業人として必要な資質・能力の評価手法の実践研究」運営委員（2018年～2022年）。

経済・金融教育にも関心があり、プライベートではその普及活動にも力を入れる。1級ファイナンシャル・プランニング技能士、CFP®認定者。

スライド3

2 ベネッセの教育情報メディア VIEWnext のご紹介

学校教育情報誌

VIEWnext 高校版  
（高校教師対象・年5本発刊）

VIEWnext 教育委員会版  
（教育委員会対象・年3本発刊）

【コンセプト】  
 先生方と共に創る教育情報＆オピニオン誌

教育情報ウェブサイト

VIEWnext ONLINE  
（学校関係者・保護者・教育に関心のある一般の方対象）

【コンセプト】  
 学校の今に寄り添い、教育委員会とともに未来を描く

3つのメディアを通じて教育情報・オピニオンを発信

スライド4

3 本日、お話しさせていただく内容

- 高校における生成AI活用の現状と課題
- 高校における生成AI活用の事例
- 生成AIと次期学習指導要領

弊誌で取り上げた、高校における生成AIの活用事例などをご紹介しながら、上記の3点を通じて、生成AIが高校現場や次期学習指導要領にどのような影響をもたらしているのかを、ご報告申し上げます。

スライド5

4

**高校における生成AI活用の現状と課題**

スライド6

5 生成AIにかかわる教育動向

時期	生成AIにかかわる教育動向
2022年11月	OpenAIがChatGPTを公開
2023年1月	アメリカ・ニューヨーク市の公立学校がカンニングの懸念から、ChatGPTの利用を禁止する
2023年2月	アメリカ等の大学で学内AIポリシーが急速に作成され、高等教育でのガイドライン整備が始まる
2023年5月	東京大学が授業でのAIツール利用に関する方針を公表。「一律禁止はせず、授業ごとに扱いを決める」「AI生成テキストはそのまま提出することは不正」などを明示する
2023年5月	ニューヨーク市の公立学校が生成AIの利用禁止措置を撤回
2023年7月	文部科学省が初等中等教育向けの暫定的ガイドラインを公表
2024年12月	文部科学省が初等中等教育向けの暫定的ガイドラインを改訂
2025年5月	東京都が全都立学校で生成AIを活用した学習を開始することを公表

生成AI普及の契機

↓

教育への利用に対する懸念

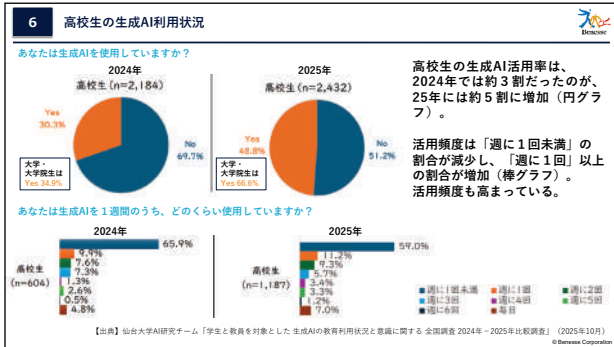
↓

大学がガイドラインを作成し、利用制限が緩和

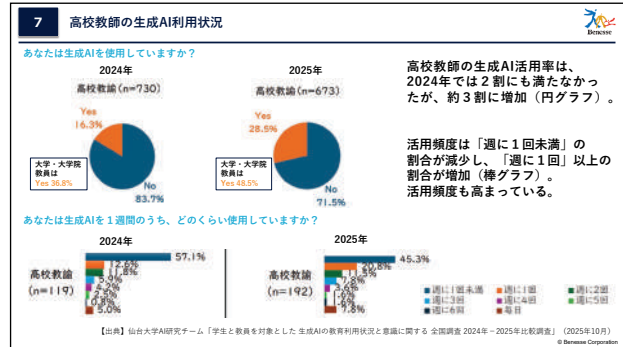
↓

国のガイドラインが公表され、小中高での利用が普及

スライド7



スライド8



スライド9

### 8 高校生の生成AI利用目的

項目	学生		高校教員		大学・大学院教員	
	2024年	2025年	2024年	2025年	2024年	2025年
授業の課題やレポートの作成	57.6%	58.3%	57.1%	56.5%	57.7%	61.8%
暗号学習	22.7%	22.1%	24.8%	23.5%	20.5%	21.5%
テスト問題の解答	14.9%	16.3%	16.1%	17.0%	13.8%	15.2%
情報の収集	33.7%	35.0%	34.1%	34.0%	34.1%	37.4%
外国語の翻訳	27.6%	28.6%	31.3%	30.9%	24.1%	27.4%
データ分析・数値計算	16.1%	17.6%	16.4%	17.2%	16.8%	18.2%
画像・グラフの作成	11.9%	10.6%	13.7%	11.6%	6.7%	9.2%
プログラム・コードの作成・デバッグ	11.1%	10.0%	9.8%	7.3%	12.2%	11.8%
動画・動画・音声の生成	12.8%	13.9%	15.2%	14.4%	9.8%	10.7%
研究論文の執筆	6.8%	6.0%	5.3%	5.8%	7.0%	6.4%
Web記事の作成	4.4%	4.2%	5.1%	4.7%	3.7%	3.4%
ソーシャル・メディアへの投稿文作成	3.9%	4.0%	4.1%	4.0%	3.6%	4.4%
詩、物語、小説などの作成	6.2%	8.2%	7.8%	10.0%	3.9%	5.5%
その他	3.1%	4.7%	2.6%	6.4%	3.2%	3.6%

2024年・25年ともに、高校生の生成AIの利用目的は「授業の課題やレポートの作成」が約6割と最も多く、次いで「情報の収集」「外国語の翻訳」（ともに約3割）となっている。

【出典】 山台大学AI研究チーム「学生と教員を対象とした生成AIの教育利用状況と意識に関する全国調査 2024年～2025年比較調査」（2025年10月） © Benesse Corporation

スライド10

### 9 高校教師の生成AI利用目的

項目	教員		中学校教員		高校教員		大学・大学院教員	
	2024年	2025年	2024年	2025年	2024年	2025年	2024年	2025年
授業資料や教材の作成	37.7%	40.3%	46.2%	39.7%	49.3%	43.8%	27.1%	35.4%
テスト問題・設問の作成	20.8%	22.0%	22.6%	26.2%	27.7%	30.2%	13.6%	13.9%
学生の質問への回答	10.1%	12.7%	7.5%	13.5%	10.1%	16.1%	3.8%	10.4%
生徒・学生への評価・コメントの作成	10.3%	12.9%	9.7%	12.8%	10.9%	14.8%	6.3%	8.3%
授業計画の作成	11.6%	14.6%	9.7%	13.5%	14.3%	12.0%	9.8%	13.0%
課題の作成	38.1%	37.6%	37.6%	29.8%	39.5%	41.1%	51.1%	44.6%
外国語の翻訳	28.2%	28.9%	19.4%	19.9%	21.8%	23.4%	42.1%	39.1%
部分の学習ツールとしての活用	24.2%	22.1%	15.1%	19.9%	27.7%	19.2%	31.6%	27.1%
データ分析・数値計算	12.6%	16.7%	5.4%	16.3%	14.3%	15.6%	15.8%	15.1%
画像・グラフの作成	8.1%	10.3%	6.5%	5.0%	10.1%	11.5%	6.0%	10.4%
プログラム・コードの作成・デバッグ	11.9%	12.0%	6.4%	6.5%	13.8%	14.1%	16.5%	14.6%
動画・動画・音声の生成	11.8%	13.0%	10.8%	15.6%	13.4%	12.0%	9.0%	6.3%
動画・動画・音声の生成	9.9%	10.9%	6.5%	9.9%	10.9%	9.0%	12.8%	4.2%
研究論文の執筆	9.9%	17.3%	7.5%	16.3%	10.9%	19.6%	11.3%	19.8%
Web記事の作成	6.6%	7.7%	1.1%	3.5%	3.9%	5.2%	11.5%	14.6%
授業に関する書籍・記事・お便りの作成	16.1%	24.6%	19.4%	30.5%	24.4%	27.6%	9.8%	10.9%
授業の修正	29.2%	28.7%	21.5%	24.8%	26.2%	27.6%	27.1%	37.0%
その他	4.6%	1.7%	4.3%	3.5%	4.2%	2.1%	3.0%	0.5%

2024年・25年ともに、高校教師の生成AIの利用目的のトップ3は「授業資料や教材の作成」「情報の収集」「テスト問題・設問の作成」となっている。ただ、他の利用目的も軒並み増加しており、より多様な目的で生成AIが利用されていることが分かる。

【出典】 山台大学AI研究チーム「学生と教員を対象とした生成AIの教育利用状況と意識に関する全国調査 2024年～2025年比較調査」（2025年10月） © Benesse Corporation

スライド11

### 10 学校現場で生じていると高校教師が認識している、生成AIに関連する問題

あなたの勤務する教育現場において、生成AIに関連してどのような問題が生じていますか？

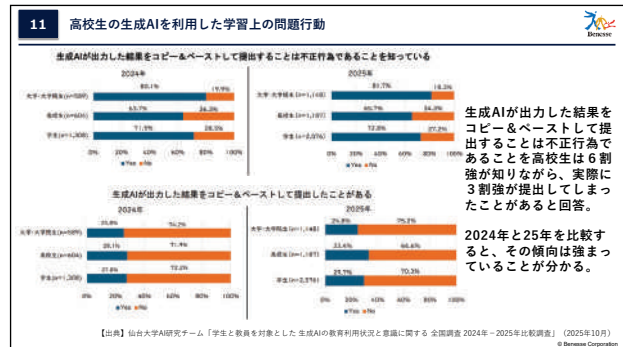
項目	教員		中学校教員		高校教員		大学・大学院教員	
	2024年	2025年	2024年	2025年	2024年	2025年	2024年	2025年
生成AIの使用が疑われる不正な提出レポート	26.3%	43.9%	22.3%	44.9%	27.5%	44.0%	44.3%	29.3%
生成AIに対する教員の知識不足	40.9%	18.5%	42.6%	17.7%	43.8%	19.8%	42.4%	21.0%
生成AIのどのような使用が、不正行為となるかの判断	25.3%	13.9%	22.7%	14.3%	25.7%	13.1%	36.8%	17.2%
生成AIを効果的に授業に組み込む方法	23.5%	9.7%	23.6%	8.1%	22.6%	9.5%	29.9%	11.4%
生徒・学生が生成AIを容易に使ってしまっていること	21.8%	5.4%	19.9%	7.3%	22.6%	5.2%	33.2%	6.8%
生徒・学生が生成AIに頼っていること	18.1%	3.6%	18.6%	2.5%	18.2%	2.7%	24.1%	8.1%
学校における生成AI利用ガイドラインがない	30.7%	2.3%	35.1%	1.9%	23.0%	2.8%	22.4%	2.8%
教員の生成AIに対する抵抗感	28.2%	2.8%	32.3%	1.2%	23.2%	3.0%	19.1%	3.3%
その他	6.3%	0.0%	4.7%	0.2%	0.1%	0.0%	1.9%	0.3%

2024年・25年ともに、学校現場で生じていると高校教師が認識している、生成AIに関連する問題のトップ2は「生成AIの使用が疑われる不正な提出レポート」と「生成AIに対する教員の知識不足」。

ただ、多くの問題が24年よりも25年が減少している中で、「生成AIの使用が疑われる不正な提出レポート」の問題が大幅に増加している。

【出典】 山台大学AI研究チーム「学生と教員を対象とした生成AIの教育利用状況と意識に関する全国調査 2024年～2025年比較調査」（2025年10月） © Benesse Corporation

スライド12







スライド 25

24 【生成AI活用事例】会議－私立静岡サレジオ中学校・高校 神谷隼基 先生

会議の議論を生成AIでロールプレイ

●神谷先生が ChatGPT に入力したプロンプト (抜粋)

●ChatGPT が作成したロールプレイ (抜粋)

自分では想定が難しい貴なる立場からの意見を事前に知っておくことで、実際の会議で思案する提案ができます。

【出典】ベネッセコーポレーション「VIEW next」掲載2023年12月号 © Benesse Corporation

スライド 26

25 【生成AI活用事例】教師の指導力向上支援－東京都狛江市教育委員会 ※小・中学校事例

狛江市教育委員会は、企業との対話を通して、企業ではデジタルによる情報共有や生成AIの活用を推進し、効果的・効率的に業務を進めていることを知り、公教育と民間とのICT活用の差を痛感。教育現場でも早急にICT環境を整えなければならないと考え、協定企業も含め、複数の企業と連携したDXの推進に動き出した。

その具体策の1つが、教員の間に生成AIを活用して回答するシステムの運用 (下図)。

●教員の間に生成AIとRAGを活用して回答するシステム

文科科学省  
学習指導要領、学習指導要領解説、学習評価に関する資料等

学校・教育委員会  
授業づくりなどに活用できる情報を質問/例: マット運動が苦手な子どもにどのような指導をすればよいか。  
教科書の内容について知りたい事項を質問。資料を数週間かけて読み込まなくても、知りたい事項が分かる。

生成AI RAG

プロンプトを入力  
大量のデータの中から必要な情報を漏れなく回答

本システムは、教員が質問を入力すると、引用元を示した上で回答してくれます。前々も、以前は数週間かかっていたことが数時間で済むようになりました。

東京都狛江市教育委員会 稲原聖子 教育長

※ RAGはRetrieval Augmented Generationの略。外部の最新情報や社内データなど、検索となる情報を参照して回答を生成する技術。

【出典】ベネッセコーポレーション「VIEW next」教育委員会版2023年Vol.2 © Benesse Corporation

スライド 27

26 【まとめ】ケース・シーン別の生成AIの活用場面

教師による生成AIの活用

校務

- テスト問題の作成
- 小論文等の課題の添削
- 進路指導のシミュレーション
- 学年通信、学級通信、保護者通信等の作成
- 指導要録・調査書の作成 (所見欄の素案の作成)
- 職員会議等の会議の議事録の作成
- メールの文面の作成
- 情報の収集
- サマリー (要約) の作成
- データの分析

授業

- 指導案の作成
- 教師の説明の補充
- ワークシート等の教材の作成
- 教育的に有用な語文の作成
- 1つの考えとして示す回答・解答の作成
- 授業アンケートの作成と回答結果の分析

【出典】ベネッセコーポレーション © Benesse Corporation

スライド 28

27 【まとめ】ケース・シーン別の生成AIの活用場面

生徒による生成AIの活用

- 情報の収集
- 自分の意見・考えの整理
- 記述問題の解答や英語のライティング、小論文等の添削
- 音声チャット機能を使った英会話、面接・プレゼン練習
- 探究学習 (課題の設定、情報の収集、整理・分析、まとめ・表現)
- 発展問題・類似問題の出現

【生徒の生成AI活用にあたっての留意点】

- 生成AIは答えを得るためのツールではなく、思考を深めるための学習パートナーとして位置づける
- 生徒の思考力や表現力、創造力の育成の観点からも、最初のアウトプットは生徒が自力で行わせるようにしたい。そのアウトプットの助言役として生成AIを活用
- 生成AIが生成する情報や回答にはハルシネーションや偏りがある可能性があることから、生成された情報や回答をうのみにせず、批判的に見て、出典の確認や複数の情報源の参照など、ファクトチェックを徹底させる

【出典】ベネッセコーポレーション © Benesse Corporation

スライド 29

28 【参考】生成AIパイロット校

生成AIパイロット校について

生成AIが急速に普及する中、文科科学省では令和5年7月に「初等中等教育段階における生成AIの利用に関する暫定的なガイドライン」(以下、「ガイドライン」という。下記にリンク掲載) を公表しました。当ガイドラインを踏まえ、文科科学省としてのパイロット的な取組として、教育活動や校務において生成AIの活用に取り組む生成AIパイロット校を指定し、「効果的な教育実践の創出」を行うことで、今後の必要な議論に資するよう、知見の蓄積をすすめることとしています。

●令和5年度生成AIパイロット校の事例  
リーディングDXスクール生成AIパイロット校 | 令和5年度 | リーディングDXスクール

●令和6年度生成AIパイロット校の事例  
リーディングDXスクール生成AIパイロット校 | リーディングDXスクール

【出典】文科科学省「リーディングDXスクール」サイト © Benesse Corporation

スライド 30

29

生成AIと次期学習指導要領

【出典】ベネッセコーポレーション © Benesse Corporation

スライド 31

30 一昨年末、文部科学大臣から中央教育審議会へ、2つの諮問が行われた

**学習指導要領自体に関する諮問**

初等中等教育における教育課程の基準等の在り方について  
⇒ 学習指導要領の次期改訂

**学習指導要領の実現の担い手である教師に関する諮問**

多様な専門性を有する質の高い教職員集団の形成を加速するための方策について  
⇒ 教師の量的・質的確保

2つの諮問は連携しながら現在、中央教育審議会で検討が行われている

スライド 32

31 学習指導要領の次期改訂に関するスケジュールの見直し

	令和6年度 (2024年)	令和7年度 (2025年)	令和8年度 (2026年)	令和9年度 (2027年)	令和10年度 (2028年)	令和11年度 (2029年)	令和12年度 (2030年)	令和13年度 (2031年)	令和14年度 (2032年)
小学校		中教審諮問	24・12・25	25・9・10	26・8・18	27・3・31	28・3・31	29・3・31	30・3・31
中学校									
高校									

各教科等のWGでの議論、中教審における検討、審議まとめ、周知・徹底、教科書採定、採択・採給、移行開始、2030年～全面実施、2031年～全面実施、2032年～全面実施

スライド 33

32 諮問文に見られる生成AIに関する記述

**社会状況 (抜粋)**

生成AIなどデジタル技術の発展は、変化に伴う困難や負荷を個人や社会に負わせるだけでなく、多様な個人の思いや願い、意志を具現化し得るチャンスを生み出している側面もあります。生産年齢人口が急減する中、テクノロジーを含むあらゆる責務を担い、全ての子どもが多様な可能性を開花できるようにすることが、我が国の未来のために不可欠です。

**課題 (抜粋)**

二点目として、習得した知識を現実の事象と関連付けて理解すること、生成AIには扱えない概念としての知識の習得や深い意味理解をすること、自分の考えを持ち、根拠に基づいて他者に明確に説明すること、自律的に学ぶ自信がある生徒が少ないこと等に依然として課題が見られます。

**審議事項 (抜粋)**

生成AIが飛躍的に発展する状況の下、個別の知識の集積に止まらない概念としての習得や深い意味理解を促すとともに、学ぶ興味、社会やキャリアとのつながりを意識した指導がより重要となる中、そうした授業改善に直結する学習指導要領とするためにどのような方策が考えられるか。

(中略)

生成AIをはじめデジタル技術が飛躍的に発展する中、中小高等学校を通じた情報活用能力の抜本的向上を図る方策についてどのように考えるか。

(中略)

生成AI等の先端技術等に関する教育内容の充実のほか、情報モラルやメディアリテラシーの育成強化について教科等間の役割分担を含めどのように考えるか。

(中略)

外国語教育について、小学校高学年の外国語科を導入する等、小学校から高等学校まで大幅に充実がなされた中、生成AIの活用を含め、今後の在り方をどのように考えるか。また、手軽に質の高い翻訳も可能となる中、外国語を学ぶ意義をどのように考えるか。生成AIの高額なコストを考慮し、多様な

スライド 34

33 2025年9月末、学習指導要領の次期改訂に関する「論点整理」が取りまとめられた

本日日本「論点整理」と各ワーキンググループの議論の内容を基に、次期学習指導要領の検討状況(中でも生成AIがかわる点)についてお伝えします

スライド 35

34 次期学習指導要領は3つの方向性の下で検討

現在の学習指導要領で目指していることの一層の具現化・深化を図る

次期学習指導要領に向けた検討の基盤となる考え方

- 1. 深い学びの実現 (Deep Learning)
- 2. 多様性の包摂 (Inclusiveness)
- 3. 実現可能性の確保 (Feasibility)

多様な個性や特性、背景を有する子どもが多くなっている実態に向き合う

教育課程の実施に伴い、教師に過度な負担・負担感が生じないようあり方を追求する

多様な子どもたちの「深い学び」を確かなものに

自らの人生を担い出すことのできる 意志的で積極可能な社会の創り手 ともに育む

現在の学習指導要領を内容面・運用面においてアップデートする

スライド 36

35 概念習得や深い意味理解を促す学習指導要領にするための方策

- 1) 各教科等の「**中核的な概念等**」を中心に、学習指導要領の**目標・内容の一層の構造化**を図る
- 2) 目標・内容の構造を学習指導要領で示す際は、**表形式や簡条書きを積極的に活用**する

スライド 37

36 「中核的な概念」とは？

**中核的な概念** 単元などの、一定の内容のまとまりを通じて理解する主要な概念等

【例】化学  
 個別の知識、概念が統合・結果  
 酸化  
 燃焼 錆の発生 老化  
 木片は燃やすと軽くなる 鉄は燃やすと重くなる  
 広範囲の出来事・現象の理解や予測に役立つ（転移が可能）

【例】日本史  
 個別の知識、概念が統合・結果  
 近代化  
 日本の近代化（明治維新） 西洋の近代化  
 廃藩置県 徴兵令 地租改正

スライド 38

37 なぜ、「中核的な概念等」を中心に目標・内容の構造化を図るのか？

生きて働く学力  
 学力的3層構造  
 知識の有意味な使用と創造（使える）  
 知識の意味理解と洗練（分かる）  
 知識の獲得と定着（知っている・できる）  
 「中核的な概念等」の理解  
 生きて働かない学力  
 個別の知識の習得

学習指導要領で育成を目指す資質・能力は、「中核的な概念等」の理解によって生きて働くものとなる

スライド 39

38 「中核的な概念」等と「見方・考え方」

各教科等の学びの深まり  
 学習指導要領の内容の構造化で、学びの深まりを一層具体的に示す

学びの意義  
 よりよい社会 幸福な人生

学びの成果  
 資質・能力

見方・考え方

各教科等を学ぶ本質的な意義の中核  
 各教科等の資質・能力が身につくと、どのような世の中を見る視点や考え方が育ち、よりよい社会や幸福な人生に繋がっていくのかを示す

学ぶ過程  
 主体的・対話的で深い学び  
 「見方・考え方」の側面の1つである「各教科等の学びの深まり」を「中核的な概念等」として示す

【出典】令和7年4月25日教育課程企画特別部会資料1

スライド 40

39 次期学習指導要領における目標・内容の構造化のイメージ

【現行学習指導要領】  
 目標 (教科名) の見方・考え方を明かせ〜以下の資質・能力を育成することを旨とする。  
 知・技 思・科・表 学・人  
 内容 知・技 思・科・表

【次期学習指導要領】  
 改題イメージ  
 目標 以下の中核概念・能力を育成することを旨とする。【目標での見方・考え方の記載は別途検討】  
 知・技 思・科・表 学・人  
 内容 中核的な概念の深い理解(知) 複雑な課題の解決(技) 学びの深まり  
 【出典】令和7年9月25日中央教育審議会教育課程企画特別部会「論点整理」

スライド 41

40 概念習得や深い意味理解を促す学習指導要領にするための方策（再掲）

- 各教科等の「中核的な概念等」を中心に、学習指導要領の目標・内容の一層の構造化を図る
- 目標・内容の構造を学習指導要領で示す際は、表形式や箇条書きを積極的に活用する

【出典】令和7年10月14日前期・評価特別部会資料1-1

スライド 42

41 目標・内容の構造は表形式で学習指導要領に掲載

「知・技」の内容のまとまりに対応した固有の「思・科・表」が特定できる教科(地理・数学・理科など)

「知・技」が主体として「思・科・表」の深まりを支える教科(国語・英語など)

【出典】令和7年10月14日前期・評価特別部会資料1-1

スライド 43

**42 目標・内容の構造は表形式で学習指導要領に掲載**

【出典】令和7年12月2日資料WG資料

スライド 44

**43 現行の学習指導要領の記載**

第5部 理科

【出典】「高等学校学習指導要領（平成30年告示）」

スライド 45

**44 「中核的な概念の深い理解」や「中核的な概念等」は別の言葉に置き換わることに**

【出典】令和7年10月14日総則・評価特別部会資料1-1

スライド 46

**45 次期学習指導要領における「情報活用能力」の定義（構成要素）**

【出典】令和7年9月25日中央教育審議会教育課程企画特別部会「論点整理」

スライド 47

**46 情報活用能力の抜本的向上の方向性イメージ（教育課程の改善）**

【出典】令和7年9月25日中央教育審議会教育課程企画特別部会「論点整理」

スライド 48

**47 情報活用能力の育成に係る各教科等の関係**

【出典】令和7年12月8日教育課程部会「情報・技術WG資料1」

スライド 49

**48 情報活用能力の抜本的向上を目指す**

1. 教育課程の充実を通じた「情報活用能力の抜本的向上」(イメーシ)

2. 育成する人材の規模 (イメーシ)

【出典】令和7年12月8日 教育課程部会 情報・技術WG資料1

文理の枠を超え、高校卒業生全員に対し、**数理・データサイエンス・AIを「日常の生活や仕事等の場で使いこなす」**ことができる「リテラシーレベル」の学習を保障する枠組みを構築

スライド 50

**49 教育課程における「メディアリテラシー」の位置づけ**

生成AIによるハルシネーションや、人間の認知特性を踏まえたアルゴリズムによる情報の取捨選択や提示の最適化が進む中、真偽不明なものも含めて情報があふれるデジタル社会においては、真に必要な情報を吟味し、適切に取り扱う力の重要性が高まっており教育課程においてもその整理が必要

「メディアリテラシー」は、情報を社会的・文化的背景の中で多岐に渡って行ったり、発信したりして、社会参加する考え方や態度であり、情報活用能力の構成要素と捉える

各教科等で育まれた「クリティカル・シンキング」を、情報活用能力の育成の後となる教科等において統合的に働かせて「メディアリテラシー」を育成

【出典】令和8年2月13日 教育課程部会 情報・技術WG資料1

スライド 51

**50 「メディアリテラシー」に関する内容の考え方**

「メディアリテラシー」に関する内容は、現行の情報科目の考え方（情報社会で責任ある行動するための必要な考え方・知識）と整理すること、現行学習指導要領で「情報」を担っていた役割の大部分を担う

「メディアリテラシー」に関する内容は、情報モラルとともにも「適切な取扱い」の一環として扱うことと整理し、明確化してはどうか

【出典】令和8年2月13日 教育課程部会 情報・技術WG資料1

スライド 52

**51 AIを使いこなす力の育成に向けた2つのアプローチ-AI自体を学ぶ** (②適切な取扱い、③特性の理解)

AIを使いこなす力（※AIリテラシー）の具体的な内容に関しては、**情報活用能力の「①活用」「②適切な取扱い」「③特性の理解」という枠組みを意識しながら、「AI自体を学ぶこと（②適切な取扱い、③特性の理解）」と「AIを活用して学ぶこと（①活用）」に分解し、学校段階ごとに検討する**

学校段階	「AIを活用して学ぶこと」(①活用)	「AI自体を学ぶこと」(②適切な取扱い、③特性の理解)
小学校	AIが生成した画像や音声、動画などを鑑賞し、その面白さや面白くないところを話し合ったり、AIが生成した画像や音声、動画などを活用して自分たちの作品を作ったりする。	AIが生成した画像や音声、動画などを鑑賞し、その面白さや面白くないところを話し合ったり、AIが生成した画像や音声、動画などを活用して自分たちの作品を作ったりする。
中学校	AIが生成した画像や音声、動画などを鑑賞し、その面白さや面白くないところを話し合ったり、AIが生成した画像や音声、動画などを活用して自分たちの作品を作ったりする。	AIが生成した画像や音声、動画などを鑑賞し、その面白さや面白くないところを話し合ったり、AIが生成した画像や音声、動画などを活用して自分たちの作品を作ったりする。
高等学校	AIが生成した画像や音声、動画などを鑑賞し、その面白さや面白くないところを話し合ったり、AIが生成した画像や音声、動画などを活用して自分たちの作品を作ったりする。	AIが生成した画像や音声、動画などを鑑賞し、その面白さや面白くないところを話し合ったり、AIが生成した画像や音声、動画などを活用して自分たちの作品を作ったりする。

【出典】令和8年2月13日 教育課程部会 情報・技術WG資料1

スライド 53

**52 AIを使いこなす力の育成に向けた2つのアプローチ-AIを活用して学ぶ** (①活用)

AIを使いこなす力（※AIリテラシー）の具体的な内容に関しては、**情報活用能力の「①活用」「②適切な取扱い」「③特性の理解」という枠組みを意識しながら、「AI自体を学ぶこと（②適切な取扱い、③特性の理解）」と「AIを活用して学ぶこと（①活用）」に分解し、学校段階ごとに検討する**

学校段階	「AIを活用して学ぶこと」(①活用)	「AI自体を学ぶこと」(②適切な取扱い、③特性の理解)
小学校	AIが生成した画像や音声、動画などを鑑賞し、その面白さや面白くないところを話し合ったり、AIが生成した画像や音声、動画などを活用して自分たちの作品を作ったりする。	AIが生成した画像や音声、動画などを鑑賞し、その面白さや面白くないところを話し合ったり、AIが生成した画像や音声、動画などを活用して自分たちの作品を作ったりする。
中学校	AIが生成した画像や音声、動画などを鑑賞し、その面白さや面白くないところを話し合ったり、AIが生成した画像や音声、動画などを活用して自分たちの作品を作ったりする。	AIが生成した画像や音声、動画などを鑑賞し、その面白さや面白くないところを話し合ったり、AIが生成した画像や音声、動画などを活用して自分たちの作品を作ったりする。
高等学校	AIが生成した画像や音声、動画などを鑑賞し、その面白さや面白くないところを話し合ったり、AIが生成した画像や音声、動画などを活用して自分たちの作品を作ったりする。	AIが生成した画像や音声、動画などを鑑賞し、その面白さや面白くないところを話し合ったり、AIが生成した画像や音声、動画などを活用して自分たちの作品を作ったりする。

【出典】令和8年2月13日 教育課程部会 情報・技術WG資料1

スライド 54

**53 教科ワーキング・グループにおける、生成AIが関連する議論の一例**

1. 現状や予想される将来に対応した学習内容の在り方

- 現代社会の重要なインフラとなりつつある**AI技術**や**数理科学**、**データサイエンス**の仕組みを理解し、適切に活用できることによる観点から、それらの**理論的・技術的基礎である基礎的数学**、**算数**、**確率論**、**統計学**、**確率論**、**統計学**に関する学習（それぞ**行列**、**微分**、**積分**、**確率**、**統計**）を教育課程上より重視してはどうか（高等教育における**数学**、**データサイエンス**、**AI**モデルリテラシーとの接続に留意が必要）⇒ **「行列」の復活**
- 国際的な学力調査で日本の15歳の**数学的リテラシー**は世界トップクラスを維持している一方、**高校卒業後の進路として理工系が選択されない現状**（学部生のうち理工系は17%）。この一因として、**数学教育全体を通じて、数学と社会・職業との関係が十分理解されていない状況**があることや、**高校の教育課程で、数学の学習意欲を高めるような工夫がAIリテラシーの育成に必要**ではないかと考え、これらについて学ぶ学習内容を設けてはどうか。⇒ **「数学がダンス（仮称）」の新設**
- AI技術**や**データサイエンス**が急速に進化するなど、**変化が激しく将来が予測不可能な社会**となりつつある中、「**自らの人生を舵取りすることができる**」民生的で持続可能な**社会的乗り手**として生きていくためには、**論理的**、**批判的に考える**、**判断できる力**（**クリティカル・シンキング**）が**必須**であることから、**数学的推論や論証（証明）**に関係する学習を充実してはどうか。⇒ **「社会を読み解く数学（仮称）」の新設**
- 学習に対する**興味・関心**が低下している傾向や**市民生活や職業生活における数学の重要性の高まり**を踏まえ、**生徒が数学を学習する意義**を実感できるようにすることが必要。このため、**日本の数景を数学的にモデル化する学習など**と**探求的な要素を含む学習**を充実させてはどうか。⇒ **「社会を読み解く数学（仮称）」の新設**

【出典】令和7年12月22日 算数・数学WG資料

スライド 55

**54 教科ワーキング・グループにおける、生成AIが関連する議論の一例**

**数学 算数・数学ワーキンググループでの議論**

2. 生徒の多様なニーズに対応する科目構成の在り方

- 現行、全ての高校生が履修する「数学Ⅰ」については、高等学校卒業時点で身に付けておくべき**数学的素養の修得のために必要となる内容に整理したうえで、引き継ぎ、必修科目として位置づけてはどうか**、「数学Ⅰ」の学習内容の見直し
- 現行、履修の順序が規定されている選択科目「**数学Ⅰ—数学Ⅱ—数学Ⅲ**」については、**既習事項を基に新しい事項を学習すべき内容であることから、引き継ぎ、必修の順序を規定することは妥当と考えるかどうか**、各科目の学習内容に見直すべき点はあつか、**「数学Ⅰ」の学習内容の見直し**
- 現行の「**数学A**」「**数学B**」「**数学C**」については、以下の実態が生じていることから、生徒が自らの進路希望等に合わせ、**必要な学習内容を選択し履修しやすくなるよう、各学校が柔軟にカリキュラムを編成・実施できる方向で見直しはどうか**、「**数学A**」「**数学B**」「**数学C**」の区分けをなくす
  - ✓ 高等教育段階での**数学・データサイエンス・AI教育**に繋がる学習内容を含め、重要度の高い内容が、**数学A・B・C**に散在し、私大文系志望者に十分履修されていない実態
  - ✓ **社会生活・職業生活、人生設計における合理的判断に必要な内容**について、**全員が学んでいない実態**
- 以上の検討を行うに当たり、**論点整理で提言された、「高等学校における科目の柔軟な組み合わせを可能とする仕組み」の積極的な活用促進について、生じうる課題とその対応策を含めてどのように考えるか。**

【出典】令和7年12月22日 算数・数学WG資料  
© Benesse Corporation

スライド 56

**55 教科ワーキング・グループにおける、生成AIが関連する議論の一例**

**数学 算数・数学ワーキンググループでの議論**

高等学校数学科の科目構成の見直しイメージ（仮定案）

【科目構成案】

- 必修科目「**数学Ⅰ**」に新たな分野として「**数学ガイダンス（仮）**」「**社会を読み解く数学（仮）**」を配置
- 「**数学A**」「**数学B**」「**数学C**」の区分けをなくし、必要な学習内容（分野）の選択を容易に
- 「**行列**」の復活
- 「**社会を読み解く数学（仮）**」は、「**数列**」「**行列**」「**統計的な推測**」「**場合の数と確率**」から基礎的素養を抽出し、構成

【出典】令和7年12月22日 算数・数学WG資料  
© Benesse Corporation

スライド 57

**56 教科ワーキング・グループにおける、生成AIが関連する議論の一例**

**数学 算数・数学ワーキンググループでの議論**

【「**数学ガイダンス（仮）**」に含まれる要素のイメージ】

【出典】令和7年12月22日 算数・数学WG資料  
© Benesse Corporation

スライド 58

**57 教科ワーキング・グループにおける、生成AIが関連する議論の一例**

**数学 算数・数学ワーキンググループでの議論**

【「**社会を読み解く数学（仮）**」で扱う内容のイメージ】

【出典】令和7年12月22日 算数・数学WG資料  
© Benesse Corporation

スライド 59

**58 教科ワーキング・グループにおける、生成AIが関連する議論の一例**

**数学 算数・数学ワーキンググループでの議論**

【「**行列**」に含まれる内容のイメージ】

【出典】令和7年12月22日 算数・数学WG資料  
© Benesse Corporation

スライド 60

**59 教科ワーキング・グループにおける、生成AIが関連する議論の一例**

**外国語 外国語ワーキンググループでの議論**

AI時代に外国語を必修とする本質的意義の再整理 (Ver. 3)

人間同士のリアルなコミュニケーションにより、細やかな介介する機会と比べて得られる情報格段に広がり、多面的視野に繋がる

AIにより手軽に翻訳・通訳が可能となる中であっても、出力の正確性・適切性を術的に検討したり、ツールの力も使いつつも、リアルなコミュニケーションを行ったりするためには相応の英語力が必要という視点や、外国語によるコミュニケーションのためにAI技術を効果的に活用する力が必要という視点もある

【出典】令和7年12月24日 教育課程部会 外国語ワーキンググループ資料  
© Benesse Corporation

スライド 61

60 教科ワーキング・グループにおける、生成AIに関連する議論の一例

外国語 外国語ワーキンググループでの議論

AI時代に外国語を学ぶ意義について  
～AIによる代替・補完の観点から（イメージ）～

**AIに代替・補完されるもの**

● 教科に、教材まで、多量に集約・翻訳  
※ 外国語学習の効率化はできませんが、学習内容の広がりや学習意欲の向上、教材の更新を促すなどの効果も期待される

● 教科内容の整理、授業内容の作成  
※ 外国語学習の効率化はできませんが、外国語学習の効率化や教材の更新を促すなどの効果も期待される

**人間に求められること**

● AIによる出力の正確性の判断  
※ AIの出力は正確であるとは限りません。AIの出力をそのまま利用することは危険です。AIの出力を判断し、必要に応じて修正する必要があります。

● 文化的理解やコミュニケーション能力の向上  
※ AIは文化やコミュニケーション能力を向上させることはできません。人間同士の交流や実践的な学習が必要です。

● 自律的思考・探究心  
※ AIは自律的思考や探究心を育むことはできません。学習者が自ら考え、探究する能力を育てる必要があります。

● コミュニケーションの深い理解  
※ AIはコミュニケーションの深い理解をすることはできません。人間同士の深い交流や実践的な学習が必要です。

● 人間関係・価値観の構築  
※ AIは人間関係や価値観を構築することはできません。人間同士の交流や実践的な学習が必要です。

● 外国語学習の楽しさ・意欲・モチベーションの向上  
※ AIは外国語学習の楽しさや意欲、モチベーションを向上させることはできません。人間同士の交流や実践的な学習が必要です。

【出典】令和7年10月30日 教育課程部会  
外国語ワーキンググループ資料1

スライド 62

61 教科ワーキング・グループにおける、生成AIに関連する議論の一例

外国語 外国語ワーキンググループでの議論

①現状と課題

②AI活用による外国語教育への期待

③方向性と具体例の提示（案）

● 生成AIが教師に代わり、教科書の内容を授業で教えることができる。学習者の理解度や進捗をリアルタイムで把握し、個別指導が可能になる。

● 教科書の内容をAIが読み取り、学習者の理解度や進捗をリアルタイムで把握し、個別指導が可能になる。

● 教科書の内容をAIが読み取り、学習者の理解度や進捗をリアルタイムで把握し、個別指導が可能になる。

● 外国語教育においてAIを活用し、学習者の理解度や進捗をリアルタイムで把握し、個別指導が可能になる。

● 外国語教育においてAIを活用し、学習者の理解度や進捗をリアルタイムで把握し、個別指導が可能になる。

● 外国語教育においてAIを活用し、学習者の理解度や進捗をリアルタイムで把握し、個別指導が可能になる。

外国語教育においてAIの適切な活用は有効である旨を、学習指導要領に明記する方向

その際、

- 教師やALT等の指導における効果的な位置づけや活用方法、留意点
- 児童・生徒による効果的な活用方法や留意点
- 授業内と授業外（家庭学習等）との連携を意図した活用

といった点も具体的に示す方向

【出典】令和8年2月20日 教育課程部会  
外国語ワーキンググループ資料1





スライド 13

### DDASHプログラムをめぐる状況 12

**同志社大学**

- ▶14学部・16研究科
- ✓今出川と京田辺2つのキャンパス
- ✓多様なバックグラウンドを持つ学生
- ▶**在籍者26,853人**



8:00 10:00 6:00

**全学教育実施の際の課題**

- ▶受講生が多いこと
- ▶受講生が多様であること
- ✓バックグラウンド知識がバラバラ
- ✓時間割もバラバラ (所属学部)
- ✓学習環境もバラバラ

スライド 14

### DDASHプログラムの学習環境 13


**必修科目のオンデマンドでの実施**

- 受講生とのインタラクティブ対応
  - ▶ティーチング・アシスタントによる質問対応
  - ▶**生成AIチャットボット DAIB**
- 受講生のアセスメント
  - ▶オンライン試験サービス: Testable
- 学習ツール
  - ▶ **電子教科書: EDX UniText**
  - ▶ 動画配信システム: Panopto
  - ▶ LMS
- 修了者のフォローアップ
  - ▶ LinkedIn Learning
  - ▶ paizaラーニング

スライド 15

### 生成AI活用実証事業 14

• 同志社大学、NTT西日本、NTT EDX 教育・学習活動への生成AI活用実証事業スタート! ~教育・学習向け生成AIを活用した新たな「教えと学び」の仕組みづくり~ (2023年11月16日)



**同志社大学**  
Doshisha University

**NTT EDX**  
NTT西日本

**生成AI活用概要**

- 学生への学習支援の仕組み
- 教職員の教育支援の仕組み
- 生成AIの回答を電子教科書・電子教材に限定した利用検証
- 生成AIの仕組みを学習向けにチューニングするノウハウの展開

同志社大学、NTT西日本、NTT EDX 教育・学習活動への生成AI活用実証事業  
<https://www.doshisha.ac.jp/news/detail/001-jhik.9.htm>

スライド 16

### 生成AIの活用 15



**DAIB**  
Doshisha AI Buddy

「データサイエンス概論」「データサイエンス基礎」の授業内で、2024年4月22日リリース予定

電子教科書(EDX)と連携し、DAIBが学習をサポート


• **DAIB (Doshisha AI Buddy)**

- ▶生成AIを活用した学習支援システム
  - 講義内容の要約
  - キーワード解説
  - 設問作成
  - クイズ形式の質問

これらをセキュアな環境で利用可能に  
+ 個別の授業に特化した質疑応答を可能に

スライド 17

### DAIB 16



App Service + Azure Open AI Service

目的: 授業内容の要約、キーワード解説、設問作成、クイズ形式の質問

技術的構成: 学習者、教員、生成AI、データサイエンス教材

連携するサービス: EDX UniText, Panopto, LMS, Testable, LinkedIn Learning, paiza Learning

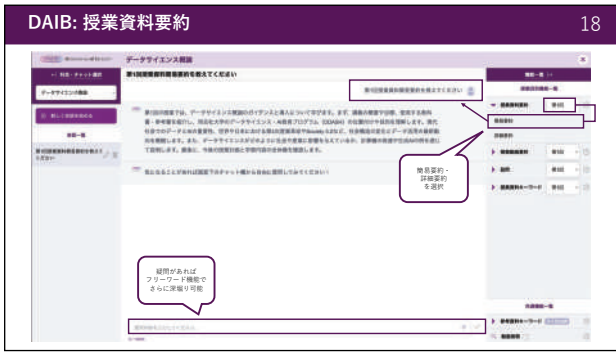
スライド 18

### DAIB: 外観 17



授業コンテンツ追加、チャット表示、チャット履歴、授業内容の要約、キーワード解説、設問作成、クイズ形式の質問、生成AIの回答、Azure App Service

スライド 19



スライド 20



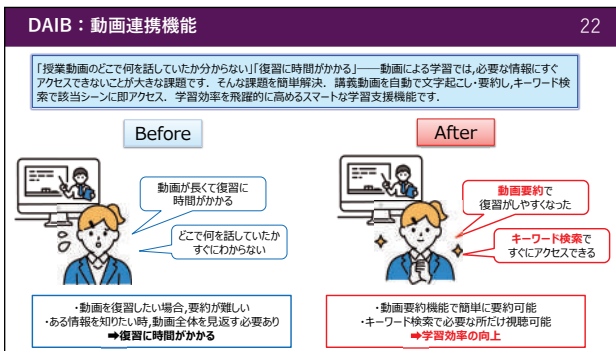
スライド 21



スライド 22



スライド 23



スライド 24



スライド 25



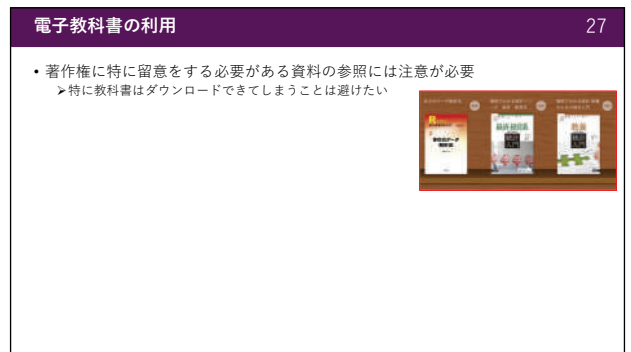
スライド 26



スライド 27



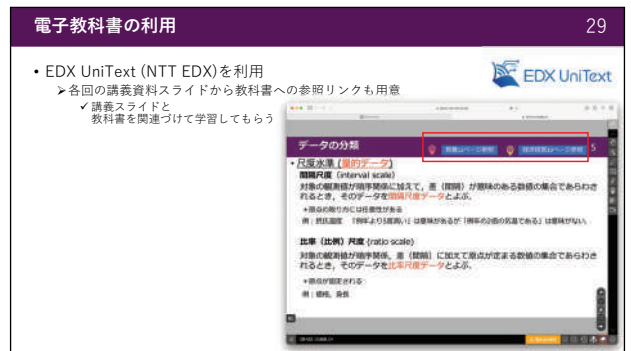
スライド 28



スライド 29



スライド 30



スライド 31

**今後の展開: 個別最適化学習システム <目的と背景>** 31

- 高等教育における課題に対し、メタ認知的気づきや自主的な学習調整による個別最適化学習の導入を目指す
- 従来教育の課題
  - ✓ 一律教育では学習者の個別ニーズに対応困難
  - ✓ 教員の個別指導負荷が高い
  - ✓ 学習者が自発的に学習する習慣が確立している
  - ✓ 学習者の自己認知精度が低い
- 解決へのアプローチ
  - 学習者理解度に応じた個別最適化
  - AIによる効率的な学習支援
  - 自主的な学習調整による自律的な学習習慣や振りの定着
  - メタ認知的気づきによる自己認知向上

**メタ認知的気づきの導入の背景**  
 メタ認知的気づきは「自分の学習について考える力」であり、「何がわかっていて、何がわからないか」を正確に把握する能力  
 メタ認知的気づきのスコアが高いとGPAが優位に高く、学習への満足度向上にもつながるという研究報告がある  
 学習者は自身の理解度を適切に把握でき、AIシステムは個々の学習状況を正確に把握し、最適な難易度の問題やコンテンツを提供可能

スライド 32

**今後の展開: 個別最適化学習システム <システム概要>** 32

- メタ認知的気づきを活用したシステム
  - 自主的な学習調整による一連のサイクルを通した学生一人一人の理解度に合わせた学習のフォロー
  - AIからのフィードバックを受けることで自身の理解度状況を把握することができ、自発的な学習意欲を高める

①メタ認知チェック・理解度確認問題実施  
 ②個別問題生成・採点  
 ③採点・AIの個別FB  
 ④チェックボード確認  
 ⑤次回目標設定

自己評価: 自己評価結果を基に主体的関与を促進  
 成功体験: 小さな成功体験を積み重ねて成功体験につながる  
 学びたい: 学びたいテーマを掘り下げられる  
 自分の位置づけ: 自分がどこにいるのか自分の位置を把握できる  
 自己立案: 自分で学習の進捗を管理

スライド 33

**今後の展開: 個別最適化学習システム <システム概要>** 33

- システム全体の流れ(予定)

①講義終了  
 ②メタ認知チェック  
 ③理解度確認問題  
 ④メタ認知評価  
 ⑤個別問題生成  
 ⑥個別回答・チャット機能  
 ⑦AI自動採点・フィードバック  
 ⑧学習結果ダッシュボード(予定)  
 ⑨次回目標(予定)  
 ⑩教員用分析ダッシュボード(予定)

スライド 34

**今後の展開: 個別最適化学習システム <主要機能要件>** 34

- 主要な機能の要件概要

機能	要件
メタ認知チェック・理解度確認問題	・講義ごとのトピックに対し3段階の自己評価 ・受講者が選択した講義回の全トピック×2問出題に回答し、理解度を確認する ・メタ認知/理解度チェックの結果から自己評価のずれがあるかどうかをAIが判断し表示
個別問題生成・採点	・問題自体はDAIBで作成した問題の感想ツールから生成 ・難易度: 3段階、出題形式: 選択問題で、AIが感想ツールから自動で出題 ・回答中、出題内容や問題の解説は、正誤に応じ、難易度(ヒント(足場))を自動で上下させる ・回答結果はAIが採点し、解説付きで表示する(解説しなくても可)
学習結果ダッシュボード(予定)	・メタ認知/理解度チェック、個別問題回答の結果をもとに、AIからの評価、自己評価、同じ授業の受講生の平均(個人は中央値)を表示
次回目標(予定)	・1カ月単位もしくは授業4回ごとを1チームとし、学習結果ダッシュボードの結果の振り返りと次回のチームの目標を記載する
教員用分析ダッシュボード(予定)	・メタ認知や問題を回答した受講者の学習状況の評価や、メタ認知チェック/理解度確認、個別問題回答の提出率や理解度の推移をグラフで表示 ・講義トピックごとの理解度ヒートマップやAIによる相関分析結果の表示

スライド 35

**今後の展開: 個別最適化学習システム <想定される構成>** 35

- 本機能は3つのエージェントと1つのオーケストレーターによって制御する想定

オーケストレーター  
 ①アセスメントエージェント(評価・診断)  
 ②ラーニングエージェント(学習進行・適応)  
 ③フィードバックエージェント(フィードバック)  
 データストア

スライド 36

**今後の展開: 個別最適化学習システム <画面構成>** 36

- 本システムは受講者用画面、教員用画面をそれぞれ用意する想定
- UIイメージは次ページ以降を参照

- 学生用画面構成
  - メタ認知チェック・理解度確認問題  
L 選択式の理解度自己評価画面/確認問題
  - 個別問題  
Lメタ認知/理解度確認問題の結果に応じた個別の問題出題画面
  - 採点結果  
LAIによる採点と解説画面
  - ダッシュボード(予定)  
L通知、理解度や回答状況のグラフ、他学生との比較分析、次回の目標記入、等
- 教員用画面構成
  - 教員ダッシュボード(予定)  
L概要、キーワード理解度分析、学生管理、講義分析のタブで構成
  - 講義トピック管理  
LAIが作成したトピックの確認、登録、編集
  - 個別問題管理  
LAIが作成した個別問題の確認、新規追加、難易度設定

スライド 37

今後の展開: 個別最適化学習システム <学生用画面イメージ> 37

• ダッシュボード



The screenshot shows a student dashboard with a purple header. It features several data visualization components: a line graph at the top right, a donut chart in the middle, and a bar chart at the bottom right. On the left side, there are several panels with text and smaller charts, including a prominent purple box with a white button.

スライド 38

今後の展開: 個別最適化学習システム <教員用画面イメージ> 38

• 教員ダッシュボード



The screenshot displays a teacher dashboard with a purple header. It contains multiple line graphs and bar charts arranged in a grid. The top section includes a large summary area with text and a few key metrics. The bottom right corner has a table with columns and rows of data.

スライド 39

今後の展開: 個別最適化学習システム <教員用画面イメージ> 39

• 教員ダッシュボード (つづき)



This screenshot continues the teacher dashboard from slide 38. It features a large table with a color-coded header (green, orange, red) and several data rows. To the right of the table, there are additional panels with text and smaller charts, providing further details on the data presented in the table.

スライド 40

学生に期待される学びの形 40

- 生成AIの有効活用：学習のパートナーとしてのAI
  - AIの基礎的な知識やリスク、プライバシー問題を把握した上で、AIの出力を鵜呑みにせず、学生自身の考察や編集を加えるなど「使いながらも主体的に考える」
- ICT機器の有効活用：AI時代の学習基盤
  - AIを活用した個別最適化学習システムやアダプティブラーニングなど学生一人ひとりの理解度に応じた学習
  - VR（仮想現実）やAR（拡張現実）技術を利用したメタバース（3次元仮想空間）での学習
- 教室以外の環境での学び：多様な学習環境
  - 時間や場所にとらわれない対面授業とオンライン授業を組み合わせたハイブリッド型授業
  - 実社会と連携した探究型・プロジェクト型授業（PBL）